

古文書と共に〔八〕

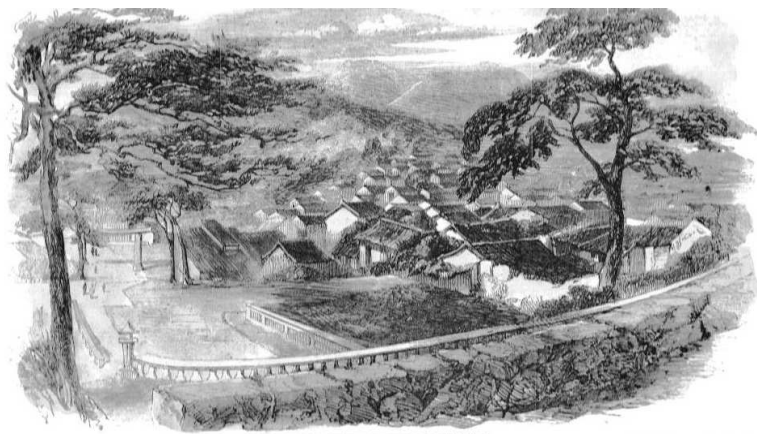
古文書の補助資料として絵図がある。村明細帳の絵図は村の山川畑など地形や家並みが描かれ見かけるが、他にはあまり見ることがない。ここに一枚の絵図がある。これは桜島が書かれているので薩摩藩の軍艦の配備図のようで、幕末の薩英戦争で使われた船と同じ形式をしている。何かの古文書の説明にために描かれたものだろうが、他のことは分からない。

英国のイラストレイテド・ロンドン・ニュースという絵入りの新聞が一八四〇年代に発刊された。当時の日本を紹介した記事が連載されていて、薩英戦争などの戦闘の様子も詳細に記述されている。当時は写真もあつたがその製版技術はなく、多くは派遣された記者に同行した画家が現場をスケッチして記事とともに本国へ送ったのである。新聞に掲載される段階でスケッチは銅版画にするため、彫版師が細部を描き写真のようになりリアルな絵にされる。このとき彫版師が東洋の他の国のイメージを持っていたのであろうか、不自然な雰囲気を持つ絵が描かれているものもある。

しかし写真のようになりリアル感とは比較にならない。これは印刷技術の違いもあるが、日本の絵は様式化されて、浮世絵のように陰影のない平坦な面で顔や景色が描かれる。イラストレイテド・ロンドン・ニュースの挿絵は人物では家茂、慶喜、老中、明治天皇らが付人らと共に当時の服装、表情、姿勢そのままに描かれるなど、幕末、明治の史料として重要な価値を持つであろう。

幕末頃の長崎 諏訪神社境内

イラストレイテド・ロンドン・ニュースの挿絵（銅版画）



写真かと思うほどリアルな表現である。日本の風景であるがどこか西洋風な雰囲気も醸している。絵によっては美術的な価値もあり英国では手彩色して額装にして販売されている。これはその一つである。



此所方桜島之間者
通船相成不申候

福山
此所方
城下迄海上
七里

蒸気船
遠見番所

新御台場

キヲノノス(キヤノン砲のことか?)

大筒(以下切れ)

桜島

此所二水雷火仕掛二而仕候由

朱之通二而通船致(以下切れ)
(航路曲線は朱書きである)

桜島方城下迄三里
但所二寄近キ所茂在之由

小船大板二十五間(以下切れ)

戦争後
海中口上
新御台場

当時の日本には、幕府で三六隻、諸藩で九四隻という多数の洋式船を持っていたが、そのほとんどが輸送船で、軍艦と呼べるものを持っていたのは、幕府と佐賀藩、そして薩摩藩程度である。当時は輸送船に大砲を積み込む事で軍用にも使用していたので、小さな輸送船でも軍艦として扱われる事があった。

薩摩藩の軍艦

図は桜島と鹿児島湾である。右下に戦争後と書いてあるのは薩英戦争(文久三―一八六三年)のことであろうからその後にかかれた絵図である。大船二艘、小船五艘、蒸気船三艘と砲台と見られる建造物が描かれている。薩摩の軍艦は薩英戦争で三艘撃沈されている、その後売却、購入もあるので十艘は当時の実際の数と思われる。薩摩から長州藩が購入した大量の銃は伊藤俊輔と井上聞多が薩摩藩の「胡蝶丸」と「海門丸」に積んで運んだといわれる。

薩摩藩は鉄やガラスの製造を行い、造船、兵器の産業を興し海防の強化を図ってきた。古くは琉球、中国との貿易に力を入れ、海外に目を向けて時代を先取りしてきた藩である。オランダからは軍艦「咸臨丸」を購入し、自身では帆船「伊呂波丸」、軍艦「昇平丸」を建造して幕府に献上、日本の海防に貢献してきたので幕末には図のように最先端の蒸気船や大砲の所有、砲台の建設ができたのである。

幕府の軍艦

「富士山丸」は幕府艦隊の主力をなし、四境戦争の大島口では「翔鶴丸・旭日丸・八重丸」ら三隻と共に長州領に侵入し大島を攻撃した。小倉口では「富士山丸」と共に「順動丸・回天丸・翔鶴

丸」ら三隻が参戦した。

長州藩の軍艦

長州海軍の軍艦は「丙寅丸(蒸気船)・癸亥丸(帆船)・丙辰丸(帆船)・乙丑丸(蒸気船)・庚申丸(帆船)」の五艘である。このうち実際に砲弾で攻撃できたのは「丙寅丸」と「乙丑丸」である。四境戦争の大島口、小倉口では高杉晋作が「丙寅丸」に乗り込んで神出鬼没の奇襲攻撃を行っている。小倉口では「乙丑丸」に乗り込んで援軍として坂本龍馬が指揮をとった。

「丙寅丸」は高杉晋作が長崎にて英国商人グラバーから独断で購入した新鋭機である。「乙丑丸」は四境戦争の直前に薩摩から購入したものである。

実際に対戦したという幕府の軍艦「富士山丸」と長州藩の軍艦「丙寅丸」を比較してみよう。明らかに「富士山丸」が有利である。これを見る限り世に語られる高杉晋作の奇襲攻撃は無理があるようだ。

	「富士山丸」	「丙寅丸」
艦全長	三十一間	二十間
排水屯	一〇〇〇屯	九十四屯
出力	三百五十馬力	三十馬力
巡航速度	不明	五ノット
大砲	十二門	不明

出典 『幕末貿易史』(山口和雄著)
『長州烈風伝』(木村高士著)

『風説書』から薩摩藩の書簡

薩摩は薩長同盟のように敵味方がよく変わる国である。薩英戦争後イギリスと生麦事件の賠償交渉中、軍艦の購入交渉をして先方を困惑させて和議を結んだ。薩長同盟も坂本龍馬が仲介して敵味方逆転し、倒幕後間もなく主従関係にあった新政府と敵対するなど敵味方が目まぐるしく変化してきた。

慶応二年薩長同盟後の幕府と薩摩との書簡が前述した「風説書」に書かれている。慶応二年二月二十一日、土佐藩の浪土坂本龍馬の仲介によって京都薩摩藩邸において桂小五郎、西郷隆盛が会談し、薩長同盟が結ばれたことを幕府はまだ知らない。薩摩は幕府から長州征伐の命を受ける。薩摩藩の松平修理太夫茂久は出兵を断る書（建白書）を幕府および朝廷に提出する。歴史ではこれで薩摩藩は参戦しなかった、で終わっている。しかし幕府は簡単には納得していない。駆け引きの様子が残されている。

この文面では、建白書に対して幕府の上席老中板倉伊賀守勝静は朝命であることを薩摩藩に伝える。薩摩藩は返答としてとりあえず一隊の人数を出すことにして、一艘の船で大坂に入り、それから京都へ向かうことを伝えている。絵図に描かれた船のどれかであろうか。当時は輸送船も大砲を備えることもあり、軍艦との特別な区分はなかったようである。

もし参戦すれば萩口から攻める命が下され五境口となっていた。

(薩州から届書があったので大坂表、御所へ提出)

一 薩州方昨日御届書八御承知之事ト奉存候、先日大坂表江出候而、御理りの書修理太夫方被指出、尚又其段御所江も指出候、大坂表二而別紙御附札之通被仰出候、且從朝廷も御説得可被 仰出哉之由

一 薩州方昨日御届書八御承知之事ト奉存候、先日大坂表江出候而、御理りの書修理太夫方被指出、尚又其段御所江も指出候、大坂表二而別紙御附札之通被仰出候、且從朝廷も御説得可被 仰出哉之由

(それに対する大坂表から返事は)

御附ケ札

一 薩州方昨日御届書八御承知之事ト奉存候、先日大坂表江出候而、御理りの書修理太夫方被指出、尚又其段御所江も指出候、大坂表二而別紙御附札之通被仰出候、且從朝廷も御説得可被 仰出哉之由

書面申立候趣有之候得共、此程相達候通寛大之御趣意を以御所直相求候、未 朝命二而奉不致御裁許違背二付、無余儀回罪之段、被指向硬命之旨、御誅鋤被求候段、御奏聞之上、尚從

御所御沙汰之次第も有之候二付而者、早々出立
朝命之御趣意相貫き候様可被致候
右之通七月十四日、板倉伊賀守殿方御渡

(その後の薩州からの書付)

薩州方指出候御書付
此節長防御討入相求公端を相開候段、国元へ
相達実二天下之大変二付、兼々
禁口御警衛之命を達候得共、一浮厳重行届

薩州方指出候御書付

此節長防御討入相求公端を相開候段、国元へ
相達実二天下之大変二付、兼々
禁口御警衛之命を達候得共、一浮厳重行届

其任二堪候様、無之候而者不相濟、不取敢一隊之人数
指出し、蒸船二艘撰海江入港、追々京着二御座候間、当時
口事二付、此段差置御届申上候

其任二堪候様、無之候而者不相濟、不取敢一隊之人数
指出し、蒸船二艘撰海江入港、追々京着二御座候間、当時
口事二付、此段差置御届申上候

その後討長に対し薩摩藩は幕府と真つ向から対立するのであ
る。その様子が次のように書かれている。

『江戸幕府の制度』より

右討長の役に、松平修理大夫茂久は、建白書を呈し、討長
の出兵を辞す。よって幕府は出兵を厳命するために薩藩重
役を召せば、大久保市蔵利通この城に来る。老中松平伯耆
守宗秀面して出兵を命ずれば、利通答えていう。「方今外患
内憂眼前に横たわり、国是いまだ一定せず、この時に当り、
重ねて長州を処分するために將軍御親征の挙あることは、
御国家の御為にそもそも宜しからず、故に薩藩は出兵を辞
す」と。宗秀はいう「今もし薩藩にして出兵を背ぜざるが
如きは、幕府の威権立たず、故に薩藩は出兵を辞すべから
ず」と。利通はいう「弊藩の見る所、此の如きを以て皇國
の御為を慮かり、敢て出兵を辞す」と。宗秀重ねていう「薩
藩は他諸に異なり、天璋院様幕府に入らせらる。御親族の
御間柄よりするも、この場合に於ては宜しく速やかに出兵
すべし」と。ここに於て利通は容を改め、色を正しくして
いう「この御談じにして在る以上は、弊藩はますます以て
出兵は叶い難し、御親族たるの性格を以て、飽くまでもこ
の御出征の宜しからざることを言上致す」と、堅く取りて
出兵を肯ぜず、宗秀大いに窮す。宗秀老中席に來り語りて
曰く「今日程困ったことは、生来未だ曾て無し」と。時の
上席老中は板倉伊賀守勝静、毛利削封討伐の主張者は次席
老中小笠原吉岐守長行なり。

当事者の記述ではないので一言一句正しいかどうか疑ってしまおうが、著者の調査によって実際このようなり取りがあったことは否めない。歴史は分かりやすくするために臨場感のある表現も用いられるが、行き過ぎると小説になってしまうのである。この著作が書かれた明治はまだ当時の事を知る者が多く存在して正確なこともあるが、それぞれの過去の自慢話も加わることに注意しないといけない。

この会見は何時なのか、大久保利通はどうやって大坂城へ来たのか、もしかしたらこの船で来たのかも知れない。いろいろ調べる必要がある。